
ヘタリアン・マフィア?

五十嵐 黎兔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタリアン・マフィア？

【Nコード】

N8686V

【作者名】

五十嵐 黎兔

【あらすじ】

再び、闇の世界に新たなる動きが見え始める。始まりは一発の銃声。そして、新たなるファミリーの覚醒。三つの呪われた秘宝。激しい抗争の果てに闇の住人である彼らが手にするものとは、そして彼らの運命は？

前作から2年後のお話。『神龍』・『パイレーツ』そして今まで眠っていたもう一つのファミリー。彼らの物語が幕を開ける……。不定期更新になりました！

conflict・0

闇は始まる

男は再び闇に覆われたあの世界を傍観する。

何のために

それは彼自身にすらわかっていないのかどうか・・・

血ぬられ呪われた三つの宝玉

それが闇の世界を狂わす

「少しは我を楽しませてくれるあるか……?」

この世界を憎んでいた男は仲間のために存続を誓い

天性の力によりこれから起こることを予知した男は、愛すべき仲間を開放し

そして

眠っていたもう一つのファミリーが今日覚める

それを待っていたかのように二つの宝玉の伝承が彼らに知れ渡る

それがこれからの血幕劇に花を添えるものだとは知らずに

始まりは一発の銃声だった。

『シエンロン神龍』のボス、本田菊はとある病院に駆け込んだ。

またよろしく願いします。

一応、設定は前作のまま舞台としては2年後の南イタリアってところでしょうか。

あと、前作解散したロヴィーノのファミリーは出てこないかと思いません。

それから、今作は前作以上に暴力的なところが多いと思います。なにせ別名『抗争編』ですので。

それでは、少しシリアス多めなヘタリアン・マフィア？。よろしく願いします。

conflict・1 闇は赤く(前書き)

さて、いよいよ物語は進み始めます。

が、最初は意味わからないかもしれないかもしれません。書いてる私もよくわかんなくなってきましたw

開けたくない扉など、二年前のあの日以来なかった。だが、今菊の目の前にそれはあった。しかしはいらないわけにはいかない。菊はその重たく感じられるドアをノックし中からの返事を聞いてから中へと入った。一人部屋の個室。そこに昨日救急搬送された大切な仲間ミドリの一人。

「菊さん……ごめんなさい、私……しくじってこんな……。」

「……。」

何も言わず、菊は彼女が横たわるベットの傍らにある椅子に腰かけた。行儀のいい彼には珍しく、足を組んでいた。それだけ気がたっているのだろうか。さらにベッドの上の少女　　リンメイ　　鈴梅は罪悪感にさいなまれる。すべて自分のせいだと……。

「あなただけのせいではないですよ。」

「ですけど、私が……まかされたのに……私……。」

「あなた一人で抱え込むことではないと言ってるんです。それに、今回私があなたに頼んだあの件は、たとえ勇洙ユウシュさんでも、獅狼シロウくんでも……私でもどうだったかわからない。危険だとわかって、それでもあなたに頼んでしまった。私の力量不足です。判断力にかけてました。結果……あなたにけがを負わせてしまった。」

くやむその顔を見た鈴梅は、思わず無意識に撃たれた腹部を押さえた。

「違います……これは……これは私が油断してたから……。」

「……………どここのファミリーも……あれを
狙っているわけですね……。にしても……言ってますよね。昔
から、私はあなたに……。いえあなたたちに。“何よりも命を最優
先しなさい”と。あんなものにあなたの命をかける必要はありません。
その時はだめでも、またいずれ必ず取り戻すことだってできま
すよね？生きてさえいれば。」

「はい……。ごめんなさい……。菊さん……。」

表情は変わらなかった彼だが、室内の空気は若干緩んできていた。

「あの……。菊さん……。それで……。その……。これを……。
頼まれていた例のあれです。」

そう言って彼女はそっと枕の下に隠していたものを取り出し、それ
を菊に渡す。

「私撃たれて……。でもそれは私から流れた血に混じって、見つか
らずに済んだんです……。あ、ちゃんときれいに洗って磨きまし
たから……。」

鈴梅に手渡されたそれは、菊の手の中で赤く怪しく輝いていた。丸
い宝玉。赤い渦がその中で幾重にも渦巻いている。それこそ、闇の
世界を震撼させ、闇の住人たちを狂わす呪われた宝玉なのだった。
それを力強く握りしめた菊は、すっと立ち上がった。

「ありがとうございます。あなたはゆっくり療養に専念してくださ
い。いいですね？」

「はい……。」

鈴梅が頷くのを見た菊は、その宝玉を来ていたスーツの内ポケットにしまいこみ、その病室を出た。病室の外には、一緒に来ていた勇洙がいた。

「やはり、鈴梅さんを撃った輩は、あれ狙いで間違いなさそうです。これが我々の手にある以上、同じ目的でまた誰かが……。そんなことはさせません。これは、破壊されるべき対象なのですから。」

「鈴梅はこのままでいいんだぜ？」

「ええ……。輩の狙いは私が所持しています。彼女と私が接触したことなど、すぐにわかるでしょう。そうなればわたしがもっていると考えられますし……。さ、アジトに戻って、鈴梅さんを襲撃した輩の正体説明、やりますよ。」

「了解だぜ。」

二人は、そろってアジトへと帰って行った。

conflict・1 闇は赤く(後書き)

鈴梅(台湾です)ファンの方 (わたしもだが) 撃たれた設定すみません。

でもこうしないと物語は進まないの。

菊は荒げず、静かに怒ってるタイプだと思います。

二話です。

タイトル意味わからないのは気にしないでください何となくなので意味はないです。

それと今回はファミリーごとの章で分けてはならず、『神龍』だったりほかのファミリーだったりです。今回は彼らもまた入り混じります。

南イタリア・某所。

男が振りかざしたのは、鉄でできたパイプ。そこらに落ちていたはずのそれは、もともと建築の材料だったはずだ。だが今は、凶器と化しその白銀の軀を真っ赤に染めていた。点々と路地に転がる人あたりの地面はアスファルトの色ではなくまたもや赤い。パイプから滴り落ちる赤いしずくが点々と道しるべを記していた。パイプを握る手の力が抜け、金属音を放ちながら、それは血だまりの上へと落下した。それを持つていたはずの男は、一切の汚れも、傷もなくただ微笑を浮かべていた。この状況では異常でしかない。薄い金髪・そして風になびく白いマフラー。手にはめられた黒い手袋の中には、蒼くきらめく宝玉。今闇の世界を震撼させているそのものだ。

「ふふふ・・・汚いよ。ほんと汚い。胃の中にこれを隠すなんてね。せつかくきれいな蒼い色なのにさ。でも、久々にたのしかったよ。君らのその歪む顔。ああ、でももうその顔も見れないね。じゃ、ばいばい。」

マフラーを翻し、その男は向かう。これを待つ主の下へと。

南イタリア・某所。そこにあるのはとあるマフィアのアジト。その屋敷にあるボスの部屋で、アーサーは一人紅茶を飲んで休憩をとっていた。アジトの周りはいやに静かだ。あちこちで争いはすでに始まっている。彼がボスを務める『パイレーツpirate』も、その争いの渦中には、いる。だが、ここは静かだ。静かすぎる。まあ、この存在は仲間しか知らないから当然ともいえる。

「アーサー、報告書上がったぞ？それと、北の方で大量惨殺。それと南西では銃撃戦、それと……。」
「もうとつくにその話はここに来てるつつの。はぁ……本格的になつてきやがって……。」

部屋に入ってきたのは、今では右腕ともいえるファミリー幹部の一人フランシスだった。アーサーのデスクの上に新たに書類を重ねている。それらを軽く見ながら、アーサーはある一点で視線を止めた。

「赤い宝玉が……動いた？」

「ああ、それやっぱ喰いつく？」

「行先は……不明？どういうことだ？」

「もともと赤い奴を隠し持ってたファミリーが最近激しく争ったそうだよ。そのファミリーはほぼ壊滅。その時戦った相手のファミリーの幹部がもち去つたらしい。でも、その幹部も確か撃たれたただかなんだかで、負傷。でも……その場で赤い宝玉は見つけられなかつたらしい。あくまで噂だけど。もうほかのマフィアの手にあるって考えた方がいいんじゃない？」

「そうだな……。あと二つか……。どこにあるんだ……。やつと手がかりを得た赤い宝玉も……。どっかのファミリーの手の中。また振り出しか。つか、赤い宝玉のありかも引き続き探し出せよ？」
「わかつてるつての。」

ということとは、もうすでに搜索は始められているということだろう。ティーカップを置いたアーサーは、革張りの椅子に深く座った。はぁ……。と本日何回目かもわからないため息をつく。あの三つの宝玉それらを手に入れて何になるかはアーサー自身もわからない。何のために俺らは戦うのかさえときどき分からなくなる。毎日毎日ありとあらゆるところから様々な情報が入ってくる。だがそれがすべて真実かどうかはわからない。

「これだからこの世界は……………」

「面白いよね。」

「…………お前……………」

いつの間にかあけられているドア。そこに立っていたのは、あの白いマフラーをまとった男。

「…………イヴァン。帰ってくるなら帰ってくるで連絡入れる。」

「入れたんだけどね。なんか連絡付かなくて。」

「まあいいか。しばらくここに居んのか？」

「うん、ずいぶん楽しそうなことしてるもんね。僕もこの幹部だし、協力するよ。あ、これはほんの手土産ね。」

そういつて、アーサーのデスクの上に置いたのは、あの青い宝玉。

「…………お前…………これをどこで。」

「僕に喧嘩ふっかけてきたマフィアがもってたから。あの人たちは今頃病院かな。運が良ければ。」

「お前…………あんま派手なことすんじゃないよ。でもま、これが手に入ったのだからよしとするか。」

さて俺はこれをどうしたいんだろうな。

前作では出てなかったイヴァン現る!!

ほんとソヴェイトでひとくりしてもよかったです、あえてここに。

初登場から何してんだろうねあの人は!

水道管じゃなくて鉄パイプなのは現実的にこうかなと。。。

現代で水道管って。。。想像できなかったので。

最近、どうもカッコよく描けません。

気付くとわけわからないお話になってます。

それとアップするの遅れてすみません。

にぎやかな声。それが響き渡る観光地。そこに、一人の男が紛れて歩いてきた。平穏な風景。楽しげな声。客を呼び込む店の店員の声。道で演奏しているストリートミュージシャンの歌声。何もかも自分には異常に見える。なぜなら彼は闇の世界の住人だからである。常に戦いと隣り合わせの生活を送っている彼にとってはこっちは非日常なのだ。

「マジうざい・・・的な？」

彼はそう呟き、そのにぎやかな世界から逃れるように裏路地へとはいって行った。ふと、そこに踏み入れたところで足が止まった。何も変わらないただの路地。だがそこに染み付くのは血のにおい。ここで何かあったのはわかる。だが今は何もなかったかのように普通の道となっている。眉をひそめつつ、その男、劉獅狼リウシランは再び歩を進めた。ボスからの任務の帰り、ふと立ち寄ったその街になんの思い出もないのだが、なぜか足が向かったのだった。そしてここにたどり着いた。血のにおいはする。だがそのものはあとかたもない。既に処理は済まされた後のようだ。おそらくここで抗争があったのだろう。自分が所属するファミリーは関係していない。でなければ今頃自分のところにも何かしらの情報があるからだ。ということは違うファミリー同士の抗争ということになるのだろうか・・・。

「あれ絡みつすかね・・・。ボスに一応報告する・・・。」

ふと、そこで気配を察した。実は数分前から付けられているのはわかっていた。だからこそこんな路地に入ったのだともいえる。後方

およそ5メートルのところの壁に身を潜めている。数は一人か・・・。連絡するのを装い、懐に忍ばせた銃に手をかける。面倒事は起こさないほうがいい。変に荒げたらボスに迷惑がかかる。じゃなくても最近はあるでもピリピリしっぱなしなのだ。適当にあしらって隙を見てこの場を去るしかない。しかし、そんなことを考えていた獅狼の考えはもろくも崩れ去った。いつの間にか、その気配が消えていたのだ。獅狼は銃を片手にその壁の影へと向かって走った。角に来てそのほうへ銃を構える。だがその場所に人の影はなかった。

「なんだったんだ・・・・。」

念のため銃はいまだにしまわずに、その場にたたずむ。だが、これ以上この場に誰かが現れることはなかった。獅狼はようやく銃をしまい、その場を立ち去った。警戒は解くことはしない。

そんな獅狼を近くのビルから監視する一人の人物。

「あの人の行動・・・意味わかんないんだけど・・・。」

その人物の頭上には黒く小さな鳥が旋回しながら飛んでいた。

「帰るよ・・・。」

その男の声にその鳥は彼の肩の上に止まった。そしてその男はそのままビルの中へと姿を消したのだった。

conflict・3

闇は潜み（後書き）

余談としては獅狼が訪れたのは前回イヴァンが暴れてたwあの場所です。

そして監視する人物・・・誰でしょうねw

彼が表立って現れるのはもう少し先になると思います。

Conflict・4

闇は返り咲き(前書き)

ということ、今日から火曜・金曜更新になります！

後、若干キャラ崩壊っぽいですが。若干ですけど。
それと今回は少し長いです。

横長の椅子、それに横たわり天井からの明かりに赤い宝玉をかざして見つめる菊は、視線をそれだけに向けていた。「神龍」のアジトにはいま菊しかいない。全員出払っているため、アジト内はとても静かだった。ここはボスの部屋。ふと・・・頭に疑問が浮かんだ。

「私は・・・誰からボスを継いだんでしたっけ・・・」

2年前。自分はここのボスになることを決めた。だがその前までは自分は幹部だった。つまりボスはほかにいた。でも、それが誰かわからない。思い出せない。

「思い出さなくてもよい・・・ということでしょうか・・・なぜ私なんか・・・」

自分がボスになると決めた理由は定かなのに・・・

「我がそう、暗示したからあるよ。」

「!・・・あなたは・・・」

いつの間にか、部屋のドアの前に男が一人立っていた。黒い髪は肩の上で結わえられ、黒い双眸は鋭くも柔らかい印象だ。菊と同じ黒スーツに身を包んでいる彼は、ふうつと煙管の煙を口から吐き出した。横になっていた菊はすつと体を起こし、立ち上がる。彼との面識はない。だが、前にもこんなことがあった気がするのだ。最近ではない。もつとずつと前。

白煙が揺らめく。彼の動きの軌跡を残して。気がつけば、その男は

菊の目の前にいた。

「っ……!?!」

「久しぶりあるな、菊。」

その時、菊の頭に過去の記憶がよみがえってきた。そうだ、この人こそこの……。

「王……さん……?」

「思い出したあるな? まあ、久しぶりといっておくある。ちゃんとこの世界にいるのを見て安心したある。しかしまあ……面白くなってきたあるな。たかがそんな宝玉で、殺しあいしてるあるからな。」

「久々に現れたかと思えば、いきなりそれですか? あなたはもう関係ないのでないんですか?」

「そうある。我は一切手だししないある。だからたとえ菊、お前が殺されようと我は何とも思わないある。この腐った世界から人間が一人消えたこと……それだけある。」

菊の傍らを通り過ぎ、長椅子の肘置きにもたれかかる。瞳を伏せ白い煙を口から吐き出す。そして開いたその冷やかな瞳で菊をとらえる。彼が放つ次の言葉を待つように。

「……私……死にません。いえ……死ねません。あなたからここを継いで二年。様々なことが起こりました。とても表立って言えないようなことも、何度も何度も。私は先だって何かをする。誰かを導く。それらを得意とはしません。今も、勇洙さんやほかの皆さんに頼ってしまう。ですが、それでも……私はこのボスなんです。彼らの親でもあるんです。私は彼らを守らねばならない……いえ守りたい。守るんです。ですから……」

死にません。彼らの成長を見届けるまでは……。」

そう言つて菊はそばの壁に掛けてあつた刀を手に取る。柄を握り、さやからその刀身を抜き出す。白銀にきらめく刃。薄暗い室内でもそれは怪しく輝く。この刀はずつと昔、自分がここに入る前から持つていたもの。といつてもそんな幼いころではない。10代後半のころだった。あの頃は今思い出すと恥ずかしいが荒れに荒れていた。人殺しでさえ平気でやっていた。あの人と手を組んで。

「私がどんなにここを嫌つても、私の居場所はここ。私がどんなに守つても、それは裏を返せば人を傷つけている。この世界は矛盾だらけなんですよ。表の光あふれる世界も矛盾だらけ、でもここは……矛盾していてそれでいて……淡泊。奥が深いようできて実はわかりやすい。そんなせかいです。王さん、あなたはもうこの世界と関係ないんですね？」

「世界と関係ないとは言つてないある。お前と『神龍』と関係ないつて言つたある。」

「……では……関係ないということ……。」

菊はそう言つて、王のほうに刀の先を向けた。

「何の真似あるか？」

「今後、私はあなたを他人として認めます。もしあなたが私の家族ファミリーに手を出した場合は……あの時の比ではないですよ？背中ではなく……あなたの息の根を止める……。」

「その目……あの時の目あるな。安心しろある。我は傍観者。手も何も出さないある。せいぜい……我を楽しませてみるある。」

王の姿は煙にまぎれて消えた。菊は静かに鞘に刀を戻す。そして、刀を握りしめたまま、菊は壁に寄り掛かるように体を傾け、そのま

出す気はなかつたんですが……にーに……。
出てきたよ……。

あと菊がふっははははとか笑ってるの自分でも想像できませんw
ふっははははははでもキャラ崩壊に含まれますかね？

やや菊の過去を垣間見せつつ……にーにのポジションは好き。
なにもしないけどでも他人を混乱させる？みたいなそんなのが……
にーにはたまにでてくるかもしれせんw

? character introduction? (前書き)

ここで、『神龍』と『pirate』の人物紹介を載せます。
前回の人物紹介に多少加筆してます。が、基本変わりません。
もう一つのファミリーは小説に登場次第、新たに載せようと思いま
す。

? character introduction?

『^{シエンロン}神龍』メンバープロフィール

『神龍』元幹部・現ボス 本田菊・・・マフィア界を嫌っている男。数年前にボスであった耀を斬り、そのままアジトを飛び出して以来裏社会には関わらないようにして生きていた。だが、耀に呼び出されそこでボスを継ぐことになってしまった。耀の過去を知るただ一人の存在で、また『神龍』創設に力を貸したこともある。耀の右腕でもあった。平和主義な性格であり抗争などには現れないが、こちらが危機に陥った時は、自己防衛という名目で抗争に参加する。法律で禁止されているが、日本刀を所持し、それを用以て戦う。ボスとして二年過ぎ、彼の中でこの世界に疑問が生じている。赤い宝玉所持。

『神龍』幹部 ^{イヨンス}任勇洙・・・天真爛漫な元気幹部。耀のことは兄貴とあって慕っているが菊のことは嫌っている。というか認められない。なにかしら菊のせいにして、仕事も菊に押し付ける。(とくに書類整理など)だが、何かあると菊を呼び出す。それと起源主張というわけのわからないことをする。戦う時に菊の悪口言うのは癖。また獅狼とはいいライバルで、鈴梅とは言い口げんか相手でもある。戦うときは主に体術だが、その場にに応じて槍やトンファ・などの武器を使用する。菊がボスに着いてから、右腕として動いている。だが相変わらず菊に対する悪口と起源主張は減らない。

『神龍』幹部 ^{リウシラン}劉獅狼・・・勇洙とは正反対なクール幹部。『的』な』が口癖。基本耀も菊も嫌いじゃない。勇洙とはときどき力を競い合う仲。ちょっとした理由で最近まで刑務所の中にいた。基本口数少ないので、空気になりがちだが、ことを起こせば自立ちたがり

屋。というか目立つような行動を起こす。爆竹を使うのは日常茶飯事。主に爆竹やダイナマイトなど、火薬系の武器を使う。が、それだといざ！という時に使えないので、拳銃も同時に扱う。

『神龍』幹部 リンメイ 鈴木・・数少ない女ファミリーの一人。菊を慕う気持ちはだれにも負けず、あんなことがあつた後も菊を決して責めず、自ら力になりたいと思っている。耀のことも慕ってはいるが、菊のことになるとたとえ耀にでも反抗する。勇洙は菊のことやその他のことでよく口げんかする。菊同様あまり戦いには参加することはないが、戦うときは三節棍を用いて戦う。宝玉をめぐる抗争で何者かに撃たれ、現在はとある病院に入院中である。

『バイレツPirate』メンバープロフィール

『Pirate』ボス アーサー・カーランド・・不思議パワーを持つ男。部下をけなすような発言が多いが決して大切にしているわけではない。ただ人付き合いが苦手なだけ。フランスとは腐れ縁で、喧嘩仲間。少々(?) 秘密が多いが、部下は誰もその秘密を知らない(と、アーサーは思っている)。それはかれが自分ひとりで何とかしようとして誰にも相談していないからである。が、実際はバレバレなので、いつ相談に来るかな とフランスは思っている。武器は主にけん銃や剣など。後不思議パワー(笑)。それと料理も武器になるという変な体質である。本人にその自覚がないのでよくファミリー内で負傷者が出る。(怖!!) 今もボスとしてファミリーを引っ張る。何事も慎重に行い、抜け目はない。青い宝玉所持。

『Pirate』幹部 フランス・ボヌフォワ・・仕事中でも

ナンパしちゃうお兄さん。アーサーとは腐れ縁でもある。仕事中心パシではアーサーに怒られている。が、本人に反省はなく、いまだにそれは治っていない。そんななので、フランシスに仕事を任せると一向に片付かない。なぜマフィア、しかも『Pirate』にいるかは謎。というかこの人はなにしたいのが謎。アーサーをおちよくるのが最近のブームになってきている。アーサーの過去を知る数少ない人間の一人。武器は主に銃を使う。

『Pirate』幹部 イヴァン・ブラギンスキ・・・あまりアジトにはおらず、陰ながらにファミリーに協力する。言葉や表情からは想像できないほどの残酷な面も持つ。どんなに血が流れようと、顔色一つ変えず、にっこり笑っている。巷では死神とさえいわれるほどで、彼と戦って無事ですんだものはアーサーとほか二人しかないらしいが、その二人が誰なのかは誰も知らない。とくにアーサーも彼には指示を出さない。というより、イヴァンのやりたいようにさせているという感じである。武器は鉄パイプなど何でも使う。

conflict・5

闇は夢想し(前書き)

あー難しい・・・あー難しい・・・

シリアスというか・・・ちょっとまじめな感じの話を書くのが難しいです。

どこまでも広がる果てなき世界。それは人ある限りどこまでもどこまでも広がっていく。終わることを知らないかのように、終わりなどないと主張するように。

そこに僕は一人立っていた。

下に広がるは水面。でもその色は濃く深い赤。いや、みよつによつては黒い。そう見えるほどの異様な水面。その上に沈みもせず地面に立つようにして僕はいた。

一歩。踏み出した。丸い波紋が遠くまで広がる。

「いつになったらここから出られるんだろう……。」

何度呟いただろうかもわからぬその言葉。

もうかれこれ、5年は此処から出られていない。

だからこの外の世界で何が起きているのか、自分はどうなっているのか

知りたくて

もがいた。

もがいてもがいて……

ようやく出れたのに

出たその先も真っ赤だった。

その中に、まるで悪魔のような男が立っていて見覚えのある青い宝玉を持っていた。

思わずそれに手を伸ばしたけど

それは僕の手をすりぬけた。

違う・・・ぼくの手がそれをすり抜けた・・・

血だまりの中僕は立ちつくした

まだあそこにいるんだと・・・

本当に出れたわけではないんだと・・・

出してよ・・・

何だよ・・・

意味わかんない・・・

次に外に出た時、ある一人の男が路地に入っていくのを見た。

その男はとある路地でしばらく立ち止まって、しばらくしてはっとしていた。

何をしてるのがわからない・・・

するとその時、その男がいきなり自分のほうを向いた。

おどろいてその拍子に

またあの果てなき世界にひきかえってしまった。

ああ・・・

まだ僕は・・・

「此処にとらわれてるんだ・・・。。。」

水面の上、僕はひざを崩してその場につずくまった。

新たなしずくが水面に加わって波紋を作る……

レースでできたカーテン。それをさわやかな風が上へと吹き上げる。その部屋に置かれたベッドの上には、一人の少年が眠っていた。そのベッドの傍らには一つの鳥かご。その中には小さな黒い鳥が静かに止まっていた。そしてその部屋の出窓に腰掛ける一人の青年。その青年は、ただ窓の外を見つめていた。無表情というにふさわしい

顔つきで、ただ外を眺めていた。

「もう五年たつ・・・早く起きろ・・・じゃないとあんこがうつぬい・・・。」

だが、その青年の声は少年にはまだ届かない・・・

あれ・・・あれです・・・。

最後のセリフで青年は誰だか分りますよね？はい、その人です。
で、寝ている少年も誰だか分りますよね？

ついに彼らが動きます・・・

動きますが・・・どうも言葉がもどきになってます・・・

少々暴力的な感じですが。あと内容的には浅いのです。
そんなに話も進んでません。

会話も少なく、登場も彼一人だけですし・・・

あ、そうでもないですかね　どっちだ

力強く置く場をかみしめ、短く息を吸って地を蹴る。握りしめた古風な剣を構えたかと思うと、それは次の瞬間には相対する人に斬りかかっていた。うめきながら、その人物は地へと伏す。剣を携えた男はさらに止まることなく、その後ろにいる人物にも切りかかる。噴き出す血しぶきが彼のほほに赤い点を描く。剣の刃に付着した血をふるい落とす。だがそれはまたすぐに赤く染まる。ようやく彼が止まったのはそれから5分がたとうとしていたころだった。剣を鞘におさめ、はあつとたまっていた息を吐き出す。茹^っだるげに前髪をたくしあげながら、アーサーは自分のほほに付いた血に気がついた。短く舌打ちし、それを手の甲で拭う。

「ったく・・・ふざけんじゃねーよ。何が楽しくてこんなやつらとどんぱちしなきゃなんねーんだっつもの。」

ここはもう何年も使われていないであろう廃工場。用事で出かけたアーサーだったが、ふと付けられていることに気がつき、わざとこの廃工場に来たのだ。そしてアーサーを尾行してきていたどこかのマフィアの下っ端は完全に伸びていた。死んではいけない。ひどくて重症だろう。重体という診断を受けないだけましだ。それに彼らも闇の住人。普通の病院になど世話にはなれないだろう。いい闇医者を知り合いがいればいい。そんなことを考えついてアーサーはふつと短く笑みをこぼした。我ながら馬鹿らしい考えをしたそう思ったからだ。そういう自分も致命傷を負ったらどうなるのか、あてなどないのだ。

廃工場を後にし、アジトに戻ったアーサーは剣を自室の壁に立てかけると、スーツの上着とネクタイを取って、そのまま寝室に行く

てベットに飛び込んだ。そしてすぐ後悔する。せめてシャワーでも浴びればよかったと。おかげでベットにもあのいやな鉄に似たにおいが移ってしまう。だがもう体を動かすことさえしたくない。思ってもなかったあの戦いのせいで疲れがどつと出てきた。もう、今日の仕事でさえ終えられるのか分からない。休みなど会ってないようなものなのだ。たとえ部下に休みをとらせても、自分は休みなど取らないことが多い。3時間眠れるならいい方だ。昨日は1時間も寝れなかった。寝る暇すらなく、抗争。そんな生活が最近多くなっていた。それもあの青い宝玉を手に入れてからである。そして思う。あれが抗争を引き寄せているのではないだろうか。それはあなたが間違っではないだろう。なぜなら、あの青い宝玉を狙って抗争は起きるのだからである。あの青い宝玉にそうさせるほどの価値があるのか、アーサーは知らない。知っているものなど、この世界にはいるのだろうか。そんなようにも思う。アーサーはいつの間にか夢の世界へと旅立った。

一人の男が、とある小さな三階建てのビルの前に立っていた。じつと、入口の前に立っている。そして、意を決したかのように歩きだし、入口付近にあったセキュリティシステムの指紋認証とパスワードをクリアし中に入って行った。そこが『神龍』のアジトだと知る者は少ない。

次回予告的なものをはじめてみる。

〜次回〜

『神龍』のアジトを訪れた一人の男。彼を迎え入れる菊の思惑とは・
・
そしてその男とは・・・・『神龍』に新たな動きが・・・・？

になるだろうと思います。

conflict 7

闇は誘う(前書き)

すみませんでした。

何とかなりました。本日夜にもう一話更新いたします。

（一月前）

ある男はその日、家で静かにしていた。何もすることがないわけではない。ただ、虫の知らせ……とでも言うのか何かがあるそう思ったのだ。口に含んだいれたてのコーヒーの苦みをかみしめつつ、ただ何かを待っていた。

二時間ほど経ち、気のせいだと思い腰をおろしていたソファから立ち上がった。そして外の空気でも吸おうと部屋から出て行こうとした時だった。部屋の中に置かれた携帯電話が、震えた。どれはすぐに震えるのをやめたためメールであることが分かった。ドアから半分で書けていたその男はすぐに携帯電話のもとに向かい持ち上げた。操作し、今来たメールを開く。差出人のその名は……

「『神龍』……ボス……菊？」

f r o m : 『神龍』ボス

x x / x x 1 0 : 3 9

題：

お久しぶりです。お元気でしょうか。

最近お話を聞きませんが、

どうやらこの世界から足を洗われたそうで……

そんなあなたにこのようなお話を持ちかけるのは
いかななものかとも思いますが

一度お会いできないでしょうか

返信はいりません

もしよろしいのなら一ヶ月後の今日

私のアジトへいらしてください

入口のセキュリティおよびパスワードは

あなたの知るときのままです

では、お待ちしております。

本田菊

「一ヶ月後？」

なぜそんな先の話を今してくるのだろう。確かに彼はまじめだ。だが、それでもこんなにも早く約束を取り付けるような相手では自分はない。とするとこの一カ月の期間というのは、菊側で何かがあるということだろう。これから一カ月忙しくなり、約束をする暇がない。だからその前にこうして彼らしくもなく携帯のメールなんかで約束してきたのだろう。でなければ、律儀な彼のことだから、長々しい手紙でも送ってくるか、電話で直接となるだろう。

男はしばし、メールを見つめ、その後携帯を置き去りにし外へと出て行った。その口元にはほのかに笑みを浮かべながら。

余談ですが、メール打つのにあたふたしてる菊が可愛いと思う。あくまで私の妄想の中ですが・・・

実際にそういうことはないと思いますが・・・きつと神業のごとく字を打ち込むでしょう・・・w

きつと絵文字を使うのにドキドキしてるに違いない。私がこんな絵文字なんて・・・って思ってたほしい・・・すみません自重します。

USB見つけました。今さっきWペン立ての奥底になぜか入ってました。今度からしっかりしまつようにします。（当たり前です）

conflict・8

闇は加わる(前書き)

さて、男の正体は・・・

男は、アジトの奥へと続く長い廊下をゆっくりと歩いて行った。

ボスの部屋は一番奥だということは知っている。もう何回も来たことがあるそこは、どこに何があるのかすら手に取るようにわかってきた。薄暗い屋内、だが陰湿さは微塵もない。それはボスの気質からだろうか。なぜ彼が自分を呼び出したのか、それは男自身わかるようなわからないようなそんな感じだった。もう自分は子の世界との関係を絶った。いや、絶たされた。だからこそ、もうこの世界のだれからも連絡はないものだと思っていた。それなのに、突然送られてきたメール。そのメールが一体何の意味を持っているのかすべてはこれから明かされるだろう。男が一番奥にある両開きの豪勢なドアの前で立ち止まった。一呼吸置いてから、くいつとややずれかかった眼鏡を直し中へと入った。

以前来た時にはその室内には独特の空気に包まれていた。それは前ボスが焚いていた香の香りのせいでもあった。だが今は全く何もない。男は部屋の中央へと向かった。そこに置かれた長椅子。それに市制よく腰掛けている黒髪和服姿の男。彼こそこのボスであり、あのメールの差出人、本田菊だった。

「よくお越しくございました。いらしてくださり感謝しておりますよ」

「ほんとはどうしようか迷ったんだぞ」

「ええ、ですから返信無用で、あなたのご自由になさるようにはしたんではないですか？」

「そうだぞ。で、俺に何か用かい？」

「この世界に、戻ってくる気はありませんか？」

「え……？」

「アルフレッドさん、私があなただを呼んだのはほかでもありません。

『神龍』に……入りませんか？」

男 アルフレッドはその言葉に、目を丸くした。一度『pirate』に所属し、その後フリーの情報屋をしていた。だが二年前『pirate』のボスにこの世界からある意味追放されたのだ。その自分を『神龍』に入れる？何を考えているのだろうか。

「ちょっと待ってくれよ。どういうことだい？だって俺は、『pirate』の一員だったんだぞ？そんなよそ者をなんで……」
「くすつ……おかしいですか？」

「おかしいとかじゃなくて……俺が裏切るかもしれないって言うてるんだぞ」

「裏切るんですか？どこに？」

「ッ……」

「構いませんよ。この世界はそうでしょう？裏切って裏切って裏切つて。ときには仲間を売って、仲間をだまして、仲間を殺して自分だけ生き残る。自分の主だけを生き残らせる。どこまでも卑劣で愚か……。そんなことを覚悟しなければ生きていけませんよ？誰がどうしようと私は知りません。ただ……私の大事なものを傷つけられるだけは許せません。ただそれだけです。」

一度、最後の言葉を放った一瞬。菊の瞳に影が生じた。漆黒の闇夜を思わせるその瞳が、さらに濃く深い闇の色をした。さらに空気がその時だけぐんと下がった。だがそれもすぐに消え、今はいつもと変わらぬ菊がいるだけである。

「私のやり方と、あなたが以前までいたところのボスのやり方は違うと思います。それに慣れるまで大変かもしれませんが。私もそうでしたし……。それでも……頼めますか？」

「……わかったんだぞ」

「では、これからよろしくお願いしますね」

「ねえ、菊」

「はい？」

「今、私もって言ってたけど………どういう意味だい？」

「……それはまた今度………ということだ」

菊はそういうと立ち上がり、アルフレッドを連れその部屋を後にした。

ということ、アルフレッド復活？

アルフレッドのキャラ紹介は新たなファミリーが登場後そちらと合わせて載せようと思います。

〜次回予告〜

(前回忘れてましたねw)

南イタリアでも北に位置するところにある一軒のマフィアのアジト。

そこで、一人の男が目覚めます。

それは新たな抗争の幕開けとなる

conflict・9

闇は覚醒す(前書き)

やっと彼らが動きます。

南イタリアでも北方にある町。そこにもとあるマフィアのアジトがあった。はたから見たら普通の洋館。だがそこそ闇巢食う館なのだ。その館の一室は、談話室のようになっていて、落ち着いた色彩のソファや、木製のテーブル、アンティーク調の家具が並んでいる。その部屋の中央にあるテーブルに、一人の少年にも見える青年がおでこをひつつけていた。慣れない仕事をして早五年になるが、やはりまだ慣れはしない。

「大丈夫け？」

「ど……どうでしょうか……。こんな大変だとは思ってなかったです……若いのに、こんな仕事してて……」

「それが原因かもしんね……」

「ですかね……」

「それでも……早く起きたほうがいい……」

「そうですね！みんな……あの日からどこか元気ないんですもん……ダンさんも……ノルも……どこか無理して見えるんですね……平気な顔装ってるって言うか……」

あの日から、まるで空に雲がかかるようにみんなほんとの思いを隠してしまった。ほんとは心配で心配で、くるってしまうほどののに、それを隠す。いつもどおり、平常なままだと偽って……変わりにくく過ごす。でもそれがかえって不安を仰いでいるようにも思えて息苦しくなる。此処が一番安心できる家よこなのに。

「このままじゃ……僕らどうなるんですかね……。僕もいつまでもアイス君の代わりしてるわけにはいかないですし……」

「ん……」

「……………ごめん……………」

「えっ!?!」

「……………」

声がるするほうへ、二人が振り向く。その部屋のドアが開き、そのあたりの壁につかまりながら危うく立っている少年がいた。長い間寝たままだったためか、その肌は青白く、足腰は弱っているようで今にも倒れそうだ。

「ア……………アイス君!?!」

「目……………覚めたか?」

「うん……………心配掛けてた……………ごめん……………もう大丈夫……………。ティノ……………僕の身代わりしてくれて……………その……………」

「いいよいいよ!アイス君が起きたんなら、そうですよねべールさん!」

「んだな」

「もう始まつてる……………呪われた宝玉を奪い合う争いが……………」

そういつ、アイシーリアの手のひらの上には白銀の世界を思い起こさせる純白の宝玉が握られていた。

うわああああああああああああああああ
スーさん難しい！アイス君がアイス君じゃない！！

あ、ようやく出てきてくれました。方言無理な北欧ですw
方言頑張ってるほうです。が、たぶんもどきです。翻訳サイトをうまく活用できませんorz

それと人名にしているので、北欧も人名ですが、スーさんとフィンは一応公式？のを。で、それ以外の三人はオリジナルです。最後にアイシーリアって出ましたし……。ほかの三人は、私の書いていたほかの小説からそのままパクってきました。

アイスランド アイシーリアです。略してアイスって呼ばれますね。ほかの二人は出てきたら表記します。
さて、このファミリー名を考えねば……

重大なミスを犯しました。

宝玉の色間違えた！！

緑ではなく白でしたorz

前回のはすでに修正済みです。すみません！！

小説レイアウトの色は宝玉の色にしたのに……

ああ、ばかですみません。何回も謝ります。

久々に起きたアイシーリアは、ふと部屋中を見渡した。それから再び二人へと視線を戻す。

「どうかしたの？」

「ダンと、おに……ノーレはどこ？」

「二人なら仕事出てかけたよ」

「そう……僕が起きたこと一応伝えといて。あと……これから人と会うから、僕の部屋に近づかないでもらっていい？」

「え……これから？」

「うん」

「……」

「何……ベール？」

「ベールさん、身体大丈夫かって思ってるんですよ？」

「ん……」

「心配しないで……もう大丈夫だから。じゃ、そろそろだから……」

「なにかあつたら叫んでね！」

「叫ばないよ。でもわかった」

アイシーリアはそういうと自分の部屋に入った。綺麗に掃除された部屋は、五年前と何も変わっていなかった。しかし、その部屋は無人ではなかった。黒いパフィンはいつも通りいるのはいい。だが今日は先客がいた。出窓に腰掛け、己の煙管を啜えている。赤い中華服に身を包んだ男だ。部屋に入ってきたアイシーリアを見て、男はふっと笑いをこぼした。煙管を口から離し、足を組んで座りなおす。

「ようやく目覚めたあるか？」

「だれのせい？」

「我のせいあるな。相変わらずそうある」

「貴方でしょ、あの宝玉を解き放ったのって。どういうわけ？意味分かんないし」

「この面白みのかけらもない、この世界に変革を起こそうと思ったあるよ」

くくくつと笑うその男の口から、煙管の煙が吐き出される。そしてじつと、アイシーリアのほうを探るような視線でうかがっている。

「この世界はずっと平行線ある。馬鹿みたいに暗躍して、同じ結末を迎えるある。だから新しい刺激でも与えてみようっていう我の考えある。お前が目覚めたのも、そのせいかもしれないあるよ？」

「そんなことない……そうか……僕が起きてたら絶対に反対して邪魔すると思つて……それで、眠らせたんだ……」

「ようやくわかったあるか？だが遅かったあるな。ボスとしてあれを守れることを宿命づけられてたのに、それができずにほかの赤と青はほかのやつの中ある……さあ、運命はすでに動き出してるあるよ。お前はどつするあるか？」

「……………」

白濁した宝玉を手に言葉が出ずにいたアイシーリアの肩をぽんと叩いた王耀はそのままその部屋から立ち去って行った。

北欧ファミリーの名前はまだ未定のままです。すみません、いいのが思いつきません……もうしばらく出ては来ません。

あ、北欧ファミリーのボスは読んでわかりますかね？アイス君です一応。

あんことアイス君で迷ったのですが……アイス君で行ってみよう……

右腕はなると……やっぱノルになるんですかね？うーん、北欧はいろいろ悩めます。そしてなぜに耀がでてくる！？出しゃばりなんだなきっと

そして二人しかアジトにいないときはお兄ちゃんって呼んでるとすごくいいなって思うんだけどアイス君。（自重してよ意味わかんない。）はいすみません。

〜長くなっただけど次回予告！！〜（時々予告の存在を忘れる…）

雷雨の中、因縁ともいえる二人が相まみえる

一人は突然の再開にうるたえるが、もう片方は冷徹に笑う
己をそして相手を

すべてはその日と同じ雨の日に始まった……

conflict・11

間は轟く(前書き)

サブタイトルが適当……

曇天の空に時々閃光が走る。稲光ののちに、大きく轟く雷鳴。だがそれもすぐに僧都しい雨音に打ち消される。朝から続くその土砂降りのせいで、アスファルトの地面には大きな水たまりができていた。そんな道を、本田菊は一人歩いていった。鈴梅の見舞いを終え、さらにいくつかの用事を終えて帰るところである。傘から滴る雨粒と、歩きたびに跳ね上がるしずくが、彼のスーツを汚していく。傘が天空を隠し、視界が半分になっている。此処で敵に遭遇したら反応が遅れるだろう。武器の日本刀は布でくるみ肩から提げている。それも今は傘で外からは見えてはいないだろう。来るならいつでも来るがいい。そんな考えを抱きつつ、菊は雨にかすむ街並みを眺めていた。

一定の速さで歩んでいた足が突然止まった。数メートル先の路地。そこへ入っていく一人の人影を見かけたからだ。それが、昔の知り合いに似ていた。しばし躊躇した菊だったが、その人影の後を追うことにしたのか、その路地へと入る。せまい路地で、両側を建物に囲まれ、その先はさらに薄暗い。闇へと続く道とでもいえる。そこに、先ほどの人影がいた。走ってきたのか、ずいぶんと意気が上がっていて、建物の壁にもたれかかっていた。雨のせいで、菊の足音がかき消されているからなのか菊が近づいていても気付く気配はない。こんな土砂降りの中、息が上がったその人物は傘すらさしてはいなかった。

「こんな土砂降りの中、マラソンでもしてたのですか？」

「！？……おま……えは」

声をかける気まではなかった菊だったが、思わず声が出てしまった。菊の声でようやく自分がここに一人ではないと把握したその男

は、顔をあげて菊の姿を見た途端、そのエメラルドグリーンの瞳を丸くさせた。

「お久しぶりです。『pirate』ボス、アーサー・カー克蘭ドさん？」

「菊が……なんでこんなところに……？」

「なに、ただの帰り道ですよ。2年ぶりでしょうかね。あの時は敵襲に遭い、何もご挨拶もせず申し訳ありませんでした」

「……」

「そんな警戒なさらずとも、今は戦う気はありません」

「今は……ね。相変わらず、言葉選びは達者だな。あの時は驚いた。まさかこの世界にまだいるなんてな。さっさとあっちの世界に逃げたんだとばかり思ってたからな」

「相変わらずの皮肉めいた言葉をどうも。ええ、逃げてましたよ。自分の主を背後から切りつけ、この世との離別を図らせていただきましたし。まあ、その主に呼び戻されるとは思いませんでしたが。ですがあなたにも驚かされます。アルフレッドさんとマシューさん……でしたっけ？ 大事な方たちをよくも手放しましたね。あなたは人一倍執着心がお強い方だと思ってましたが？」

「それとこれとは話が違うんだよ。いつまでもあいつらを、この世界に置きたくなかっただけさ」

「自分のもとにでしょう？ さすがのポイ捨てぶりですね。私にはまねできませんよ。それで、今日はどうして傘もささずにこのような場所へ？」

「お前に関係あるのか？」

「ありませんね」

「なら話す必要もないだろ」

「相変わらず口が堅いんですね。あなたのファミリーの情報はうちの情報収集員でも手を焼いていますよ」

「それはお前のところもだろ？ たく、偽善者ぶるのもいいかげん

にしろ」

「それもそうですね。では、私はこれで失礼いたします。お忙しいところすみませんでした」

そう言っつて菊は踵を返して再び歩き出す。アーサーはそれを黙って見送る。だが、路地の入口よりも手前で菊が立ち止まった。

「私は忘れはしません。あの時の出来事を。あの時の日常を。あの時抱いた感情を。そして……私があの闇の世界を憎み嫌うようになったのが……あなたのせいだということ……。今日はそんな気分ではありませんので何もしません。ですが次にお会いしたその時は、あなたを敵だと認識して構いませんよね？」

「自分のファミリー以外すべて敵だ」

「では」

菊は傘の下で笑っていた。予想通りの答えが返ってきたからだ。

ああ。なんてこの世界は愚かなだろう。憎んでのしつて対立して。それが無限ループする。終わることのないトンネルがどこまでもどこまでも続いていく。否、続いていくのではなく出来ていくのだ。自分たちが突き進んでいくにつれ、トンネルは先へ先へと伸びていく。何度も何度も。同じことばかり続けて何が楽しいのだろう。自分と同じ世界に生きるものを殺して、何か楽しかったのだろうか。馬鹿だ。愚かだ。そんなことをしている人間たちが愚か過ぎてあきれて笑えて来る。そう思っつてしまっている自分もおそらく愚かなのだろう。これは他人に向けた笑い。そして、自分に向けられた笑いなのだ。そんな笑いを浮かべ去つていく菊の後ろで、アーサーはただ焦りと後悔入り混じる顔をしていた。去つていく男の脅威を思い浮かべながら、アーサーもまたその場を立ち去つたのだった。

この二人は仲がいいんですかね？どうなんですかね？
もう書いてて意味がわからなくなりましたこの二人。

この二人は過去にいろいろあつたんです。またその話のちほど。

〈次回予告〉

ついにそろそろ最後のファミリー。

ボスは静かにこれからの目的を告げる。

それがさらに闇の世界の歯車を加速させる。

すみません。

活報で、今日二話投稿するとかほざいてた馬鹿がいましたが、
どうもそうもいきません。

リアルで忙しく一話書き上げるので精いっぱいでした。
深くお詫び&反省し、今週は一話のみの投稿となります。

夢を見た。世界が崩れるその瞬間の夢を、僕は見た。でも片方の世界は未だ存在してる。でも僕が生きる世界は死んだ。生きる場を失った、闇に生きる人達はみんな、路頭に迷い明日を見いだせずにいる。僕はそれが夢だと知りつつ、恐れを感じた。だってそんな中に僕も含まれていたから。

「今一度……三つの呪われた宝玉をこの手に……」

アジトである館から、彼方を見つめるアイシーリア。白く雪の固まりのような宝玉は、彼の手の中で妖しく煌めいている。そこへドアを開き中に入ってきたのは、前髪をかきあげた元気が取り柄の青年だ。

「アイス！赤い宝玉の在りかわかったつぺよ！」

「ほんと？」

そこへ不機嫌顔のクロスのヘアピンを付けた青年が現れる。

「あんこうざい。隣の部屋まで聞こえた」

「ノル、いい加減諦めたら？」

「ならお前も兄ちゃんって呼べ」

「いやだ！」

「兄ちゃん」

「やだ！」

さらにそこにつっこり笑顔の青年と、いつも通りの仏頂面？の青年が現れる。

「まだそれ催促してるんですか？僕もお兄ちゃんって、呼ばれてみたいですね！」

「そか」

「そか、じゃないし。もう皆意味分かんない。……狂わされたこの世界の歯車を今一度、元に戻す。その為には……」

僕は何だっつてする。どんなことでも。

「貴方の思い通りにはさせないよ、王耀」

この世に面白みがない。

そんなのわからないよ。

だって、僕の周りにはこんなにも

愉快的仲間がいてくれるんだ。

それなのに、そんな仲間の輪の中に入らずに

面白みがないなんて決めつけるあなたのことが

僕は嫌いだ。

絶対にあなたの思惑は僕が阻止するから

あなたが僕を眠らせた。

でも再び目覚めさせたこと

後悔させてあげるよ。

Conflict・12

闇は動き出す(後書き)

次回予告

赤き宝玉のもとに

白き宝玉の持ち主現れて……

また危うく忘れるところでしたw

この話だと菊がもう黒い黒い…

キャラ崩壊してないことを祈りつつ書きました。

置かれた湯呑茶碗。その中には若葉色のきれいな緑茶が、湯気を立ち込めさせている。それを見つめる、アイシーリアはちらりと眼の前で座っている黒髪の男を見た。慣れた手つきで湯呑を傾けるそのしぐさには一片の乱れもない。

「あなたが来るのをお待ちしていました」

「それ、まるで僕がここへ来ることを知ってたかのようだ」

「ええ、知っていた。というよりは、ある人から聞いていたというべきですね」

「それって、王耀？」

「さて、どうでしょう」

くすりと笑いながらそう答える菊。それはもう、肯定しているのも同然と見受けられる。そういえば、此処の前のボスはあの人だったなと思いだす。この人も同じだろうかそう思ったアイシーリアは、ふと菊に尋ねかけた。

「あなたも、この世界の变革を望んでいるの？」

「变革……ですか？」

「あの人はそう言ってた。この世界はつまらない、だから面白く変えるんだって。此処の前ボスはあの人だった。だから、その……」

「私も同じ意志だと？」

「違うの？」

「ふふふふつ……私とあの人は違います。たとえ同じファミリーを率いたとしても、その志は同じになるとは限りません。私はこの世界がつまらないとも楽しいとも思いません。それは私にとってこの

世界がどうでもいい世界だからです。どこでだれがどうしようとして、それはそれで全く構いません。もともと私はこの世界が嫌いですから」

「でもあなたは、この世界に戻ってきた」

「ええ、此処には守らねばならないものがありますから、当然でしょう。私のファミリーを守ること、それ以外は特に興味も関心もありません」

「じゃあ、なぜ赤の宝玉を？」

「これ……ですか？」

そういつて、菊はスーツのポケットから赤い宝玉を取り出した。

「今、この世界では抗争が激しさを増しています。その原因はこれあと2つある子の宝玉をめぐり、あちこちで血が流れています。私のファミリーの一人も現在病院で療養中です。こんなガラス玉一つで、傷つけられる仲間ができるなど私は我慢なりません。だからこそ私はこれを集めるのです。奪い合う必要がなくなればいいんですから」

「あなたはこれを破壊したいの？」

「そももいえますね」

「？」

「私はですね、この世界を壊したいただそれだけなんですよ」

菊が指定してきた対談の建物から帰る途中、アイシーリアは橋の上にいた。夜になり、漆黒に染まるその川は、水の流れる音だけで静寂に包まれていた。

「この世界の破壊……僕は……この世界をどうしたいんだろう。それに、僕はどうしたいんだろう」

アイシーリアのその問いは、ぽつりと小さな川の流れる音にかき消された。

「この白い宝玉は、ちゃんと見定めないと……あるべきもとへ……」

南イタリア某所にある教会の屋根の十字架の上。そこに腰掛けるは、この世界に混乱を招いた男。

「お前が見定めなくても、それはもう行方は決まっているあるよ。我が定めた運命に従って。お前らは抗い、争い、そして狂気におぼれ、堕ちていくある。深い深い闇の底へと……特にお前ら三人は……覚悟しとくあるよ。ボス共」

お前らはすでに盤の上にいるのだから……

長いのか短いのかよくわからない長さになりました。

そして菊はやっぱりこの世界（マフィアの世界）を嫌ってますね。
そろそろ北欧のファミリー名考えないと

（次回予告）

ついに、3つのファミリーが激突する……かもしれませぬ
要するに未定です。金曜日更新します。

やっと抗争編らしくなってきましたね。

最近この話を書くのが難しいなと思っていたのですが、
なぜだかわかった気がします。

主人公がいない……

それぞれのボス3人にスポットを当ててはいますが一貫して
主人公といえるキャラがいないんですよ。

だから難しいのかな……

ですがいまさら主人公投入するわけにもいかないのです、このまま頑
張ろうかと思えます。

にしても終わりが見えません。

20話くらいで終わらせる予定だったんですが……

ということは章はつけてないですが、

一応最終章になってるってことなんですかね黎兔さん？

「しりません。というかあなた誰？私だよね？」

なんてさっさとはじめましょう。

『争い』

それは些細なことでおこるものである。敵対する者それが相まみえただけで、それは勃発するのだ。正当な理由。そんなものはいらない。ただ己が思うままに動き、争うだけである。それゆえに、身勝手、自由気まま、思いやることなどせず。仁義も忘れ、欲深くなり、闇の中を駆け回る。獲物を狩る肉食獣のように。そのうちなる野望が眼を光らせる。何日も獲物にありつけず、飢えに飢えたそのものにはもはや歯止めも何も効くことはない。わずかなきっかけさえあればいい。広い大草原にいて、その広大な土地で経った一匹の獲物と出会う。そんなきっかけでバトルは始まる。負ければ死。勝てば飢えを逃れ、幸福を手にする。ただそれだけのこと。何とシンプルな構造だろう。

『願い』

誰もが抱きしものである。それを現のものにできるかどうかは、そのものの力量次第であるが。それゆえに、万人はそれぞれの願いを追い求めるのだ。それが自分の理想だから。願いをあきらめたものは屍と化す。たとえば体は健全であれど、心はすでに己にあらざ。たとえ他者から見てそうは思えずとも、その者自身は渴望すらできないのだ。願うことを忘れた人間は、明日すら見ていないのだ。ただ過ぎゆく時間を漂うのみ。

そしてそれは、彼らにも当てはまることだった。

南イタリア某所、廃病院敷地内。そこに似合わぬ銃声と地を駆ける足音が先ほどから響いていた。

「ほらほら！そんな逃げてばっかじゃお兄さんつまないんだけどなあ！」

「逃げてないんだぜ！お前の出方を見極めてるだけなんだぜ！！にしても菊。どういふことなんだぜ！？お前の情報通りに此処着たら『pirate』の幹部がいるとか聞いてないんだぜ！！」

「幹部は幹部でも、お兄さんは一応あのまゆ毛の右腕よ！」

「眉毛だか腕だか知らないんだぜ！どっちみちうちのボスよりは下に決まってるんだぜ！！」

「むかつ！お兄さん本気で怒ったよ！！」

「お兄さんって言うより爺だっぺよ！！」

『神龍』ボス右腕の勇珠と『pirate』ボス右腕のフランシスはひよんなことからその場に居合わせ、そのまま争い始めたのだ。それは彼らの目的のためによるものだ。もちろんその目的とはあの宝玉だ。さらにそこに『cross』の幹部ダンジエルが割り込んできた。

「お前は……どういふこと？最近めつきり話を聞かないから、『c

ross』つてつぶれたと思ってたよ」

「んなことねえっぺよ！うちがつぶれるよりも『pirate』の
ほうが先じゃねえっぺか？」

「そんなわけないでしょ！つてうひよわあ！？」

「ちっ、外したんだぜ！」

「お兄さんが話してるときに攻撃してくるなんて最低！」

「最低？はっ……上等なんだぜ。だって俺らはもともとそういう集
まりだぜ？」

最低。それは此処にとつてほめ言葉。最低であつて何が悪い。此
処では最低でいてこそ当たり前なのだから。

「じゃ、俺も混ぜるっぺよ？」

「なんでそうなるんだぜ？俺今、この髭倒すのが忙しいんだぜ！そ
れ終わったらにしろなんだぜ！」

「何それお兄さんがやられるみたいない方！お前ら二人なんかお
兄さんだけで十分だし！」

彼らはそれぞれの武器を手に、地を蹴つて前へと駆けだした。

前半は完全に偉そうなこと言ってますが、100%黎兔の勝手な言い分ですので。正当性など皆無です。

願いをあきらめても、見失っても人は考え次えへと進むこともできる。そういう生き物だとも思ってますが、あえて上記のほうを書きました。

そして勇珠vsフランスvsダン

この人選は少し後悔してます。どうせなら右腕対決にすればよかったな……と。

でもノルが割って入る姿が想像できませんでした。なので、あんこになったわけです。なんでも『ペ』をつければいいと思っけないか？なんてツツコミが聞こえるけど……

あと、北欧ファミリーの名前『cross』にしました。
彼らの国旗と、運命が交差するをかけたみました。

（次回予告）

傷も癒え、退院した鈴梅。そして彼女を安全な場所へ案内する獅狼。そんな彼らのもとに忍び寄る闇。

も…もうどうしようもない状況に陥ってます。

ということ、今日から週1更新になります。

というかもう不定期更新になりかけてます。

書きたい話はあるんですが、書けません。

ということ、頑張ります

南イタリア、某所にある総合病院。その入り口から二人の若者がでてきた。その片割れの少年はやや辺りを気にしつつ、足早に歩く。もう一人の少女も遅れを取らないように、少年に付いていく。あの日彼女は撃たれ、そしてこの病院に入院していた。そして今日、ようやく退院できることになったのだ。だが、彼女は今起こっている闇の世界の争いに戻ることは許されなかった。

「え……」

「今私が行ったことが、以降覆ることはありません。あなたは、私
が用意した隠れ家に身をひそめてください。退院時には獅狼君を護
衛として隠れ家までつきますのでご安心ください」

「どうして菊さん！私はまだ、以前と変わらないくらい元気になっ
たんです！」

「たとえあなたが完治していても、私はあなたを、この戦場に戻す
つもりはありません」

その声はとても落ち着いていた。常時落ち着いている彼でも、そ
の時の声はそのさらに上をいくほどの落ち着きだった。

「私……もう『神龍』の一員じゃないんですか……？」

「そんなわけありません」

「じゃあどうしてですか……！」

「鈴梅」

「あ……すみません、菊さん」

「……あなたの気持ちはわかります。ですが私は、あなたをこのば

かけた争いに巻き込ませたくないだけです。こんな戦……。ですから

あの時、菊さんが最後何と言ったか私は覚えてない。

そんなことを思い出しながら歩いていたせいか、鈴梅は信号で止まっていた獅狼にぶつかった。鼻を押さえつつ何とか謝罪する鈴梅のほうに、獅狼は無言で振り返った。

「昨日の電話のこと、思い出してた的な？」

「うん……」

「俺も菊さんの考えには賛同できる……」

「私も……菊さんがああいうのはちゃんと理由があるってわかってるし、決して私を仲間だと思っただけじゃなく、わけてあげないのもわかるけど……」

菊が手書きで書き記した地図と向き合いつつ、獅狼は角を曲がり路地へと入る。すたれた空き地、使われなくなったビルが建つその間を二人は進む。

「私だって戦える。みんなが戦って、なのに私は隠れて……」

「この戦いは今までとは違う。やり方も敵も、これまで以上だ。俺だってマジやばいって思うほどだから、菊さんはきつとそれ以上のことを知ってる。それだからこそ、鈴梅に隠れてるって言ったと思っ」

「うん……」

「それに……」

そこで獅狼は言葉を切った。そして後ろを振りかえる。

「獅狼……?」

「鈴梅、これ地図。なくさないで」

「え?」

「それと荷物。重いけど自分で持ってって」

「え?」

「それと……そこにいつやつでてこいのな?」

隠し持っていた拳銃を、路地の先に構える。すると、その路地の先に一人の男が現れた。獅狼よりも大柄で、白いマフラーをなびかせ、その男は徐々にこちらに近づいてきていた。

「気配消してたつもりだったんだけどね、よくわかったね」

「誰……?」

「『pirate』幹部、イヴァン・ブラギンスキ……」

「あれ、僕のこと知ってるの獅狼君」

「……鈴梅」

「何?」

「」

「でも……」

「いいからっ……早く!!」

そう叫ぶと獅狼は拳銃を持っていない左手で、さらに隠し持っていた爆薬を取り出し、素早く発火させる。その場に立ち込める爆風と煙と爆音でイヴァンの姿は見えなくなる。だがそれはイヴァンからも同じだろう。

「獅狼……」

鈴梅は、自分の荷物を抱きかかえるとそのまま目的地へと向かって走った。その姿を目の端でとらえた獅狼は、そのまま静かに視線を前方に戻す。次第に煙が晴れイヴァンと対峙する。

「ワザと……見逃した的な？」

「さて……ね」

「何が目的？」

「ねえ、赤い宝玉持ってるのってさ……君？」

その路地に立つ廃ビルの屋上。その屋上に立って階下の戦いの行方を眺める二人の人影。

「どうなるんですかっ！？アイス君はただ見定めてって言ってましたけど！」

「待つ……」

待つしかない。この争いの終焉が訪れるその時を

キャラが多いです。

獅狼でしょ鈴梅でしょ、イヴァンにティノにベールさん……あと菊もか……

てか、獅狼VSイヴァンって私も心配です……

私絶対イヴァンは敵に回しちゃいけないと思うんだ。
うんうん。

まあ、頑張つてほしいです獅狼君。

あと最後のベールさん超適当。

〈次回予告〉

因縁の戦い、それは突如始まる。
交える刃が切り開く未来とは？

不定期はいいものの少し放置気味になってしまいましたね。
どうしてももう一個のヘタリアの話を進めたがります。
あっちの方がいろいろ考えずに書けるので気楽なのです。
こっちはいろいろ設定ありすぎるんですね。

あの時もこんな雨降る空模様だった。あの日、俺達は考えを違え、^{たが}それぞれ別の集団に属した。

もう二度と、同じ敵に共に立ち向かうことは無いだろうと……
 だが、彼等は再び再会してしまった。
 敵として……

そうだ。あの時もたしか、雨だった……。

雨降る中、あわや一触即発になりかけた菊とアーサー。だが何故か争うことを始めなかった。確かに両者とも武器を携えてはいる。しかしそのどちらもその鞘に納められた刃の姿を現しはしなかった。ただ降りしきる雨に打たれるのみ。局地的なものだろうか。彼方には晴れた空、まばゆい太陽の光りが見える。あそこにはこんな争いなど無いかのよう思えてくる。

「今頃、あの子達はそれぞれやるべきことをやっているのですかね」

「随分でかい、独り言だな」

「貴方も、貴方のファミリーに言い付けを残して来たのではないのですか？例えば、宝玉を奪取しろ……とか？」

「はっ！そりやお前もだろ？」

「まああなたが間違っってはいませんね。そしてその時期を予見しこの場に居合わせている……『cross』のボスさんも、あの宝玉の行方を知りたがっている」

「……僕は関係ないよ」

「なくはないでしょう。貴方とあの人の接点の有無。そして宝玉が

動いた時間。そして現在のこの状況。それらを踏まえて出る結論……否……真実は……」

パシイ！！

「背後から狙うのは卑怯……ではなかったのですか？」

「お前……それ以上は話すなあるよ。やはりお前をこの世界に呼び戻したのは間違いだったある」

いつもとは違い黒い中華服に身を包んだ王耀。彼が背後からけり上げてきた足を、菊は振り返ることなく、刀で防いでいた。

「あなたが、一度行ったことを捻じ曲げてまで此処に現れたということは、あながち、私が言おうとしていたことは間違いではないというわけですね？」

「は？なんのことあるか？タダ足滑っただけあるよ。妙な勘ぐりするのは相変わらずあるな。お前はさっさとこの世界でも壊す算段をしていればいいある」

「おや、私がいつまでもそんなことにこだわっているとも？」

「何あるかそれ」

「時は過ぎていくんです。そして時の流れとともに、人は何かを得るんです。そして、それはのちにそのものの考えすら変えるんですよ、あなたにわかるかは、知りませんがね」

「お前……」

「さっきからきーてれば、くそつまんねー口げんかすんならほかでやってくれねーか？あ、宝玉は置いていってもらうけどな」

「うっせ ある、お前は少し黙るよろし」

「はあ？うっせーのはお前だろ、爺は帰って寝てる」

「誰が爺あるか？」

「みんな意味わかんない。僕なんでここにいるかすら分からなくな

ってきた」

「ま、我は帰るある。どうせもう、どっちにどう転ぼうと、運命はすでに決まってるあるからな」

王耀はそういうと、そのまま姿を眩ませた。

「では、私たちもそろそろ始めましょう。私はいつまでもあなたとこのような場所で話している暇などないですからね。さっさと片付けて、あなたの持つ宝玉のありかを聞き出し、そして……仲間のもとへと馳せ参じるために……」

「それはこっちのセリフだったの。いつとくが、手加減なしだぜ？」

「おや、よろしいのですか？では、私も……久々にやりますか……っ！」

菊は抜刀すると同時に、素早く地を蹴った。次の瞬間にはすでにアーサーの懐に入り込んでいた。

此処の菊がなんかつめたい。

言いたいことずばずば言つて、何か菊じゃない気もする。

アーサーVS菊はどうしようか悩み中です。

どっちも強そうですし、勝敗をつけられるのか私……

菊好きだから菊が勝つてわけではないですけどね……

アイス君はボス戦を見守ります。戦いはしません。多分……

〈次回予告〉

流れる血のその先に

光があるのか

それは誰も知らない

未知の世界。

出血多量かもしれないのでご注意ください……あくまで『かも』です
すけど

引き続きアーサーVS菊です。

問答無用で斬り合ってます。

苦手だ&そういうのは読みたくないという方はおやめください。

切っ先が下からのど元に向かってつきあげられた。それをアーサーは身をそらしてよける。ちりつとした感覚が襲ってきて、ややかすめて切り傷ができたのがわかった。踏み込みから見失ってしまった。気がつけば、目の前に白い刃が迫っていた。かろうじて身をそらしたアーサーは、左足で踏ん張り体制を整え、菊に対して剣を振り下ろした。金属同士がぶつかり合う音がその場に響いた。普通なら耳をふさぎたくないようなその音だが、今はそんなことをしている暇はない。降り注ぐ雨が視界を、そして聴覚をも奪っていく。それに何より、刀の軌道が読みにくいのだ。晴れていれば日光に反射した光で、どんな攻撃が来るのかある程度わかることができる。だが今日はそれがない。全く、最悪の条件だった。

だが、二人の武器は種は違えど同じ刃。状況は五分五分だった。

一瞬だけで着たすきを突いたアーサーの刃が、菊の左腕を切り裂いた。黒いスーツが散り、そこから赤き血が滲んできた。だが、それ以上のすきは与えず、一步踏み出し、すぐにアーサーの脇腹を突く。反応が遅れ、アーサーの脇腹に傷が生じる。たまらずアーサーは後ろに距離をとった。

「相変わらず……読めねーな」

「それはどうも……」

「それで何割だ？」

「6割です」

「マジかよ……こりゃ、俺も本気出さなきゃやべーな」

「そんなご謙遜を」

言葉を交わすのはそれだけ。次の瞬間には再び刃を交えた。左から、右からときには上下。ありとあらゆる角度から二人は自ら持つ刃を繰り出す。二人の力は拮抗していた。よけて斬りかかって、傷を負う。その繰り返した。

ぬかるむ足場。すべる足。地に描かれた戦いの足跡こんせき。切れる息。噴き出す汗。滴る雨水。奪われていく体温。

「はあっ……やっぱり強いな。相変わらず。だからこそ俺はあの時お前を誘さそったんだ」

「そうでしたね……私をこの世界に誘いざなったのはアーサーさん、あなたでしたね」

「昔は荒れて居やがったのに、変わったな……お前」

「人は変わるものです。時がたつにつれて。そして、多くの人と出会い触れ合うことで。ずっと同じ……そんなひとそう多くいるとは思えませんしね。私だってあなただって、変わりゆくものなんです
「よ」

「このまま引退しちまえよ」

「そうはいきません」

「はっ、強情」

「そうですね」

「……俺はお前を誘さそったことを後悔してはいない」

「ええ、ですから私をこの世界に誘いざなったこと……」

後悔させて差し上げますよ。これからたっぷり……

戦闘描写orz
残酷表現orz

やっぱり無理なのか？ヘタリアキャラでそういうの書くこと出来ない
んですか!？

まあ、ただ単に私の力不足ですね。あはは……orz orz o
orz

次回予告

高揚する想い
他者のために
仲間のためにふるわれる力
そして・・・砕かれし武器

意味わかんないし・・・

お久です。

スランプ気味ですので、これからどんどん遅くなるかもしれません。
なのに今回のお話は結構長めです。
どうなってるんでしょう……

一方、曇天の下で別の戦いは行われていた。勇珠の振り上げる槍がダンの斧とぶつかりはじきあう。その反動のすきを突いて、フランシスが銃弾を撃ち込んでいく。二人はそれを、武器ではじき体をひねってよける。一進一退ともいえるその攻防は、もうすでに二時間には続けられていた。だが彼らは疲れなどまるで垣間見せることなく、敵へと立ち向かっていく。この戦いは負けることなど許されな
いからである。

ともあれ、ファミリーの右腕を担うほどの力を持つ勇珠とフランシス。それにダンも右腕ではないにしても、その力は勝るとも劣らない。それぞれ実力を持つ者同士の戦いは、なかなか勝利への活路どころか、敵の弱点すら見受けることができないでいた。強者同士の戦いは、一瞬で決まるか、永遠に決まらないかのどちらかだと、誰かが言っていたのをそれぞれは思っていた。この場合はどちらなのだろうか。いや、すでに一瞬なんて時間は過ぎているのだから、答えは後者の方に決まっているだろう。だが、それはそれで困るのだ。それでは何のために戦っているのかわからない。

「あんこ、アイスがなに言ったかも忘れたのか？」

そんな状態のところ降りかかってきたその声とともに、あたりに降り注ぐ無数のあられ。もとい 巨大な雹ひょう。勇珠はそれをやりではじきつつ、フランシスは銃で砕きつつそしてダンは頭に一個くらい、後ろへと後ずさった。そしてその中央にあいた空間に、一人の男がどこからか飛び降りてきた。

「あつれー、うちの眉毛かと思ったら『cross』の右腕さんじゃない？不思議パワー使ったでしょ？」

「あんなへなちよこパワーと一緒にすんでね……」

「急に飛び込みすんじゃねーんだぜ!!」

「それは悪かった……全部あんこが悪い」

「いつてーっぺー!何すんだノル!？」

「ボス命令違反とみなして、ここで処置してもいいんだぞ？」

「ゲツ……」

「ボス命令？」

「俺ら『cross』幹部に出された指示。『それぞれの戦いの行方、そして宝玉の行方を見守れ』。アイスは確かにそう言っていた。そしてあんこ、お前は一体何してるんだ？」

「いつけね、つい忘れてたっぺよ!」

「忘れんなだぜ」

「あんこは俺が預かるから、二人はさっさと決着でもなんでも付ける。あんこ、行くぞ」

「待つっぺよ!!」

空地の隅に移動した二人。中央に残った勇珠とフランスは戦いを中断せざる終えなかったため、しばしその場で対峙していた。ぎゅつと、槍を握る手の力を強めた勇珠はそのままフランスへと向かおうとしたのだが、ふと槍に違和感を感じ、視線を落とした。そしてわずかに目を見張った。槍の柄に無数の小さなひびが入っていた。そのひびに気を取られていた勇珠の耳の片隅銃弾が打ち出される音が聞こえ、彼はとっさにその槍を前に構えて回す。キンという音とともに銃弾が地面に落下していった。

「なに?もしかしてもう降参でもする?戦いの最中に敵から目を離すなって言われてないの?」

「はっ。誰に言われるんだぜそんなこと。悪いけど戦いはほとんど自己流なんだぜ!……!?!?」

手にあつたはずの槍の感覚がない。恐る恐る地面に視線を落とすと、そこには粉々なつた槍の柄と、槍の先端にあつたはずの刃が単独で落ちていた。壊れた。

「だってもう、武器ないんだしさあ？あきらめなよ。相手が悪かつたってさ？じゃ、そろそろフィニッシュと行こうか？よかつたね、殺される相手がお兄さんでさ。本望でしょ。お前を殺した後に宝玉持っていないか調べさせてもらうから。あつたらあつたよしだし。なくてもまあ、ほかのやつらが見つけるだろうし。『神龍』の右腕殺せただけでもお手柄じゃんね。じゃ、ばいばーい！」

打ち出された銃弾は、うつむく勇珠に向かって飛んでいった。そして、勇珠の上半身にそれは消えた。だが、なぜか勇珠は倒れない。そして彼の足もとに異様に巻きあがる砂ぼこりと、無数の足跡。異変を感じたフランスはさらに数発の銃弾を撃ち込む。そして今度ははつきりと見た。勇珠がそれらすべてを手で、つかみ取ったところを。

「さっき言つたんだぜ……戦いはほぼ自己流だぜつて……。ほぼつていつのはすべてじゃない。俺ら『神龍』幹部は全員……兄貴から拳法習つてんだぜ！」

再び顔をあげた勇珠のその瞳はまだあきらめてはいない。その瞳には光があつた。

「武器なんか頼らず、己の体を研ぎ澄ませ、一打一打に渾身の力を込めふるう。まだまだ終わってねーんだぜ？」

勇珠はそういうと、真つ向からフランスに向かっていった。

勇珠って拳法？でいいんですかね？

空手とかカンフーとか見ててかっこいいって思います。
やるうとは思いませんけど。

で、ダンを肅正？したノル。

ダンを止められるのはノルしかないだろうと…

〜次回予告〜

火炎のなか彼は抗う

だがその前に

死神が降臨し……

遅くなりすみません。

今回かなり残酷な描写があります。

呼んで不快になる恐れもあるかもしれませんが。

描写がそれほど生々しいかは不明ですが。

一応の注意書きです。

圧倒的な力の差というのは、こういうものことだろうか。徐々に追い詰められていく、その相手の顔は苦痛に満ちていた。先ほどから単調な攻撃しかしてこないところを見ると、どうやらもうほとんど打つ手も、策もないことが分かる。だったら早くあきらめてしまえば、すぐに楽にしてあげられるのにも思える。そう思うと、笑いがこみあげてくる自分がさらにおかしい。死んだら全部終わるんだよ？だったら死んじゃえばいいのにね。そう思いながら、その男は近くの工事現場に散乱している鉄パイプを投げ飛ばす。それを相手は何とかダイナマイトではじき、粉碎する。

「まだ抗うの？」

「ッ……当たり前なの？……ここでお前なんかにッ……やられてる場合じゃないから……」

息も切れ、額からは血を流し、そう答える男はいまだあきらめてはいない。それどころか正気を掴もうと必死だ。そこまでする必要なんかないんじゃないかな。いい加減僕も投げるの疲れてくるんだよね。さっさとくたばっちゃえばいいのに。

「でもさあ、いい加減もうダメだってわかるでしょ？あきらめて僕に殺されちゃいなよ」

「まだ死ねない……」

「じゃあ、いつ死ぬの？」

「……」

死ねない？人ってのはさ、自分の死期を選べないんだよ？それは

この世に存在するすべての生命共通項だよ。それなのに、君は何？
まだ死ねないって。今死にかかっているのに？死んじやうんだよ？な
のに君はまだ生きれると思っっているんだ。なにそれ。

うぬぼれないでね。だったら今現実を見せてあげる

「まだ……死ねないんだ俺は……あの人に……ッ……！！！！？」
「死ねない？死なない？ううん、君は此处で死ぬんだよ」

放られた鉄槌は獅狼の腹に突き刺さった。彼の体を貫通し、先端
が背中から突き出す。パイプの中に切り取られた内臓は、はみ出す
ことなくそこに存在している。血しぶきがあたりの壁や地面に噴き
出し、逆流した血液は、口からも漏れる。力の抜けた足では体を支
えられず、獅狼はその場に崩れた。鉄の味が広がるその口からは、
苦しそくに喘ぐ声が聞こえる。鉄パイプを抜き取るうとているのか、
わずかに手が動いている。だが、ほとんど力が入っていないようだ
った。徐々に広がる血だまり。

「……ヒュッ……ハッ……あ……俺は……まだ……」
「まだなんてもうないんだよ。もう君は終わるんだからね。もう抗
わなくていいように、これで終わりにしてあげるよ」
「やめっ……つく……」

かろうじて開いていた片目の視界に、振りかざされたパイプの先
端が入り込む。今にも己の、それも頭部に振りかざされそうになっ
ているそれを止める力は獅狼には残されていなかった。

「べ……ベールさん……」

「待つしかね……」

「待つって……このまま黙って人が殺されるのを見てろっていうん
ですか!？」

「……ん」
「なんで……いくら今世界が闇に覆われてるからって……それが正しいわけないじゃないですか！！なんねアイス君は手を出さず、見守っててなんて……」
「……」

ビルの上で、二人の幹部は何もできない。

すみません……。俺もう、此処でダメみたいです。あなたには助けられてばっかだったの感じがします。でも俺……。あなたに会えてよかったっすよ……。ボス。

「バイバイ」

「ッ……」

ズガァン

一発の銃声が響いたと思った直後、パイプが真っ二つに破壊され、折れた片方は力なく、地面へと乾いた落下音とともに落ちた。
そして、その場に新たに加わる足音が一つ。

Conflict・19

闇は地に伏し(後書き)

次回予告

突如現れた救世主

だが、彼の登場により

死闘はさらに過熱する……

ゆっくりと彼は歩みを進め、戦いのさなかに足を踏み入れた。両手に携えた拳銃の片方からは、白い煙が上がっている。それがたつパイプを破壊したのだ。その彼の姿を見て、イヴァンは口元に笑みを浮かべた。

「あれ、君ってさ。もうこの世界から足を洗ったんじゃないのさ。勝手に戻ったの？」

「無理やり洗わされたんだぞ。俺の意思じゃないのさ。勝手に戻ってこようと、俺の自由なんだぞ！」

「で？今はどこ所屬？」

「『神龍』幹部、アルフレッド・ジョーンズ」

「アル……フレ……ド？」

「相手が悪かったね、獅狼。あんなモンスター相手じゃ俺以外どうにもできないんだぞ！」

「任せて……良い的な？」

「もちろんだぞ！いいからもうしゃべっちゃだめなんだぞ！」

自信満々のアルフレッドの言葉に安心したのか、獅狼はそのまま意識を手放した。だが相変わらず、彼は一刻を争う危険な状態である。それは、アルフレッドでもわかった。

「いきなり現れてさあ、何人のこと化け物扱いしてるのかなあ？」

「ほんとのことだぞ」

「君あれだよな。『pirate』にいた時から僕とは考えることもやることも何もかも合わなかったよね」

「ヒーローがモンスターと共感するわけないだろう？」

「まあ僕も君と考えが同じって言うのはなんかいやだからね。今はお互い敵対してるファミリーにいるんだから……本気で殺しちゃっ

「ていいんだよね？」

「ヒーローが負けるわけないんだぞ！」

その直後、両者はぶつかり合った。先ほどの死闘よりもさらに激しいようだった。二丁のけん銃から放たれる銃弾は止むことを知らない豪雨のように、イヴァンに向かっていく。それをイヴァンは器用にパイプで払い落とし、ある時は撃ち返したりもしていた。

アルフレッドが『pirate』にいた時から、二人は仲が悪かった。なにかと意見が食い違っていたり、任務で行動を共にした時も別々に勝手に行動したし、とにかく中の悪さは『pirate』の中でも突出していた。仲間同士であるのだが、彼らはまるでそうは思っていないようで、喧嘩もしばしばあった。そのたびに、アーサーやフランシス、当時いたマシュー等が止めに入っていた。『pirate』でも二人は結構力がある方だったから、止める方にとってはいい迷惑なのだったが、当の本人たちは知る由もなくそれはなくなつた。つまり互いにもう加減する必要はない。もちろん『pirate』にいたときも手加減などしてはいなかったが、それでも殺せはしなかった。だが今は違う。従うボスも、目指すものも違うのだから。そう、今までとは違うのだ。

「殺しちゃっていいんだもんね」

「何言ってるんだい？それは俺のセリフだぞ！」

二人の決着がつく時が来たのだ。

この話はどうなるんでしょう。

どこが勝てばハッピーエンドなのかとか、最後の締めとかどうする
んでしょう。

前回みたいな終わり方とはまた違った感じにはしたいですね。

（次回予告）

あの日振りかざした刃

それは

すべてを断ち切ったはずだった

いつからでしょうか。私がこの世界に嫌悪感を抱き始めたのは。

私がこの世界に足を踏み入れるきっかけになったのは、ある二人の人物との出会いでした。はじめ私がこの世界で所属したのは、今現在所属している『神龍』でした。といっても、まだそのころは今のよう巨大大でもなく、メンバーも戦えるという条件が備わっていたのは私を含めて二人でした。そう、当時ボスで創立者でもあった王耀以外は、とても戦いに参加させられるような年齢ではなかったのです。その頃の私はどちらかというと武器を使わず、己の身だけで戦っていました。ですがなにも、武器を持っていなかったわけはありません。自分の部屋のクローゼットの奥底に、ずっと封じていた一本の刀。ですが、それをもう使わないと固く決意していました。

私がマフィアの世界に入る前、私はとある不良と出会っていました。今となつては彼に関わつたために、この世界とも縁ができてしまったと言えるでしょう。その当時私も彼もまだ学生で、よくある不良のチームでもにあほらしいケンカに明け暮れていました。もちろんその時も私が刀を持ち出すことはなかったのですが、学生とというのは浅はかな知識しかなく、平然と刃物などを使用していて、小さなマフィアの抗争そのものでした。私はだんだんそれに嫌気がさし始めました。そして、その不良の彼に抜きたいと告げました。それが引き金となったのか、なぜか私は彼とケンカしていました。どちらもそのチームでは1・2を争うほどの強さだと言われていたせいで、なかなか決着というものは付かず、私はすきを見て逃げ出し、その世界すべてからも逃げのびた、と思っていました。

そう、私の前に王耀が現れるまでは……

「お前あるな？巷を騒がせてた不良チームにいたのは」

「誰ですか？それに、何のことでしょうか」

「今はそこから足を洗って、図書館の司書あるか……ずいぶんな変わりようあるな」

「私がどんな職に就くことに、見ず知らずのあなたからどうこう言われる筋合いはありません」

「マフィアの世界に、来る気はねーあるか？」

「なぜ？」

「お前のその考えは私のファミリーに必要なからある」

「考え？一体何のことですか？」

「あの男を憎いと思ったことはねーあるか？」

「あの男？」

「アーサー・カーランド」

「っ！？……さて、だれですかそれは、存じ上げませんが。すみませんが、これから本棚の整理がありますのでこれで」

「あいつが、マフィアの世界のとあるファミリーの時期ボスに決まったと聞いても？」

「……まだあの人は、誰かと争うことを望んでいるんですか……」

なぜ？あんなことを繰り返して、その先にあるものなど、むなし
い気持ちだけだろうに。勝ったとしても、傍らには傷ついた仲間の
姿があるのなら、気持ちが晴れることなどないのに。スポーツの試
合で勝つのと、抗争で勝つのでは違いがありすぎるのに。そして、
それをわかっていないわけでもないだろうに。当時の私はそんなこ
とを思っていた。

そんな彼をこの世界から立ちなおさせるのならと、私は王耀の誘
いに応じ『神籠』に入りました。しばらくは、抗争に参加する気も
起きなかつた私に、王耀は3人の子供の面倒を押しつけてきました。
任勇珠、鈴梅、劉獅狼の3人です。彼らはまだ、成人するには程遠

い年齢で、私にはなぜ彼らがこの世界にいるのかすらわかりませんでした。しかしのちに彼らが孤児であることを知ったのです。それも、マフィアの抗争により、親も親類も死んでしまったからだということも。

それ以降、私は抗争に参加するようになりました。彼らのような子どもが増えるのを少しでも減らしたいと思ったからです。ですが、私が抗争に参加することで、孤児が増えないとも限りません。むしろ悪化してしまうかもしれません。ですが、この闇はびこりし世界からマフィアがなくなれば、良いのではないかと思ったのです。いつになるかはわかりません。ですが、いつか来るその日に向かって、私は戦っていかうと思っていたのです。

「なあ、菊。全部のマフィアを、1日で根絶やしにしないか？」

そついう彼が私の前に再び現れるまでは……

Conflict・21

闇は振り返る(後書き)

次回予告

回想する菊

交差する思惑

苦悩の末の結末とは

そう彼、アーサー・カーランドは、確かにそう言ったのです。はじめは、何を言っているのかさえ私には理解できませんでしたが、彼の説明を聞いていくうちに、それが実現可能なことであるとわかってきたのです。ですが、私は戸惑いも感じました。それを実現させるためには、私は大罪を犯さねばならないことも同時にわかったからです。他人からしたらどうということでもないかもしれませんが、私にとつてそれはやってはいけないこと。私は少なからず、選択せねばなりませんでした。

そして、私は過ちを犯しました。今まで封じてきた、ふるわないと決めてきた刀を取り出して、今まで従ってきたボスを後ろから切りつけたのです。

「な……にして……るあるか……菊……」

「こつするしかないのです。この世界からマフィアを根絶するには……」

「そのマフィアのボスを……殺すのが……」

「そう、手っ取り早い」

「誰の策あるか……」

「あんたもよく知る、私の最初のボスですよ」

「あいつ……待……つある、菊……あいつ……の言葉は……」

その後、彼が何と言ったのか私は知りません。聞くことなく、その場を去ってしまったからです。あとで聞いた話では、『神龍』以外のマフィアのボスも、アーサーさんの差し金により、次々と襲撃され、命を落とした方もいたそうです。

ですが、マフィアが根絶することなどありませんでした。それど

ころか、抗争はさらに勢いを増してしまったのです。ボスがいなくなり、束ねる者が変わり、ボスを襲われたことからより恨みが増し手のことからでしょう。私は恐ろしくなりました。鎮まるどころか、逆にあおってしまったのです。私は、その世界をそのまま放置し、イタリヤから離れ、遠い異国の地日本へと逃げたのです。

それから数年後、私がまた『神龍』に戻るようになるのは、もう知れたことかもしれません。

現在

いまだに、刀同士が火花を散らしていた。まるで、あの時の対決の決着をつけようとしているように、二人はすべての力をぶつけあう。

私はこの作品をどうしたいんでしょう……。

ぐだぐだにならないことを祈りつつ、続きを書きたいと思います。

↓次回予告↓

負けてもいい

ただ

生かしたいだけだから

一週間あいてしまいすみません。

やっと今後の展開がつかめたような気がします えっ

まだ断言はできませんのでまた少しあいてしまうこともあるかもしれませんが

最後までお付き合いくださいませ。

あと前回の次回予告から少し内容が異なっておりますので、ご注意ください。

勢いよく蹴りあげられた左足が、頬をかすめる。ひりひりとした痛みが、そこにわずかに残る。流れるような動きは、独特の舞を思わせるかのようでそれでいて危険に満ちている。軽やかな動きに反して、一撃にはとつもなく致命的なのは目に見えている。フランシスは、勇珠が槍を捨ててからというものの防戦一方になっていた。近接戦闘には銃は不向きだからである。にしても、この男。情報によれば今のボスを嫌っていたはず。なのになぜここで戦っているのだろうか。

「何考えてるんだぜ？」

「別に？」

「嘔吐くなだぜ。さっきから守ってばかりで、何で反撃しないんだぜ？ならさっさとくたばるがいいんだぜ」

「なら聞くけど。お前ってさ、今のボス嫌いなんですよ？」

「大っきらいだぜ」

「なら何で戦ってるわけ？ボスの命令でしょ？」

「別に、これは誰からの命令でもないんだぜ」

ボスからの命令じゃない？ならなぜ……。

「うちのボスは、戦えなんて命令、一度も出したことないんだぜ。ただ、守れとは言ってたけど……」

「守る？何を？」

「それも自分たちで考えろと……。そういうお前はどつなんだぜ？」「なにが？」

「お前だつて自分のボスは嫌いな人間に入るんじゃないんだぜ？」

「あらら、知ってたの」

「情報屋がぶつぶつ言ってたんだぜ。毎日毎日飽きもせず口喧嘩ばっかでうるさいって」

「あいつ……。そう、まあお兄さんはあんなまゆ毛好きにはなれないねえ」

「なんでじゃあ」

「右腕なんかやってんのかって？腐れ縁かな。確かにうちのボスさんには共感しがたいことばかりさ。でも、かけてみたくなるんだよ。あいつの算段にはね」

「……はあ……結局そうなんだぜ……」

そういうと、勇珠は後ろへと宙返りした。突然のその行動にフラシス、そして見守っていたノルとダンすらあっけにとられる。

「お前と戦うのもういいんだぜ。なんだかんだいってボス認めてるやつと戦っても、何も得られないんだぜ」

「は？」

「……俺と同じ考えしてるやつと戦えば、この疑問が晴れるとも思った。けど、何か馬鹿らしいんだぜ。それに、もう答えなら出た。戦う理由も起きないんだぜ」

「は？え？ちよ……」

勇珠は何事かを呟いたあと、そのままどこかへと去っていった。まいった。

「なんなのあいつは。お兄さんどうしろって言うのね」

「訳わかんないっぺよ？」

「帰っぞ。……此処の戦いは終わった。そしてすべてはアイスが描くシナリオに近づいている。……やっぱいい、うるさいからあんこは此処から動くな」

「ノル、それはねえっぺよ!！」

気づけば、その場から人の気配はなくなった。

勇珠も絶対KYだと思っています。

自己中で気まぐれだと思っています。

意外と勇珠好きなんですけどね。

いっぱいだしたいけど、そんなポジションじゃないのです。

次回予告

激闘の終わり

それは突然やってくる

そして彼らは

戦いを放棄しどこかへと……

今回短いです。

書き上げて改めて読み返したんですが、短いと。

ですがこれ以上長くもなりはしないんで、このまま投稿しちゃえと。
今考えてる話、最後の終わり方が何か微妙……

戦いの騒音のせいで獅狼の意識は戻っていた。そして、目の前で繰り返らられている戦いをぼんやりとする視界で見ている。なんとこの戦いだろうか。まるで戦闘機同士の戦いでも見ているかのようだ。人間同士の戦いなのに、周囲の建物にはところどころ穴やひびが生じている。強大な力を持った者同士の戦いはこんなかんじなのかと、思わず見入ってしまう。だがふと違和感を覚える。まるでお互い全力を出してないと思えるのは気のせいだろうか。アルフレッドが戦うところはあまり見たことがないから絶対とは言えないが、いつものあのにこやかな顔を崩してはいないし、イヴァンだってさつきなどは感じられない。まるで戯れてるようにさえ思えてしまう。なぜ？

「んふふ、なんでって顔してるね。後ろの幹部君」

「ッ……」

「でも、アルフレッド君は知ってるよね。だから本気を出さない。僕もそうだけどさ」

「俺は情報屋なんだぞ。この世界で起きていることの真意くらい知ってるさ。でも、何も獅狼にあんなことしなくてもいいと思うんだぞー!!」

「あの人の目をくらませるくらいなら、あれくらいの犠牲は必要でしょ?」

「……君相当crazyなんだぞ」

「ふふ、ありがとう」

「それ、ほめてないのな?つか、あの人って誰っすか?」

「君もよく知ってる人だよ」

「イヴァンそれ以上は黙れなんだぞ!!」

「それもそうだね。んー……この機会も捨てがたいけど、まずは休戦にしようか？」

「そうだぞ。早く向かわないと間に合わなくなるんだぞ！」

「は？」

「おーいその二人！！」

そう言ってアルフレッドがばかでかい声で呼んだ相手は、そばのビルの屋上にいたテイノとベールの二人だった。

「え、あ、はい。なんですか！？」

「悪いけど、獅狼のこと頼んだんだぞ！！」

「はい？」

「僕らこれから面白いところ行かなきゃなんないからね」

「わかった……行け」

「ベールさん！？」

「thank you！じゃ、獅狼、ちょっと言ってくるんだぞ！

！君はさっさと治療受けるんだぞ！！」

「ちょ……アルフレッド！？」

そういって、今までの激闘がウソだったかのように、二人はそろってそのままどこかへと立ち去ってしまった。残された獅狼は、訳も分からずその場に倒れ込んだ。あわててビルの屋上から降りたテイノ達は、獅狼をすぐに知り合いの病院へと連れて行った。

Conflict・24

闇は戯れる(後書き)

次回予告

彼らはそれぞれの主のもとに集う

そして、ボスたちが告げるこの戦いの理由

彼らが望む終幕とは……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8686v/>

ヘタリアン・マフィア?

2011年12月11日12時47分発行